

潮風にさそわれて



明治丸（東京商船大学）

下町文化

第 185 号

平成 9 年 8 月 15 日

発行

江東区教育委員会
生涯学習部生涯学習課

海辺で探そう！

海原を駆けぬけた船の歴史

文化財とは無縁のような臨海部。でも決してそんなことはありません。どんな所にも必ず歴史があります。「下町文化」でもこれまで、「東京みなと館」（青海）や旧豊函造船船「羊蹄丸」（船の科学館そばに係留）を紹介してきました。今回はそのほかの船に関する見どころを一挙にご紹介します。みなさんも、越中島から臨海部へと船の歴史を探しにちよつと足をのばしてみませんか。

海の男を育てた

「明治丸」

東京商船大学の正門をこえて相生橋に向かって歩いていくと、左に明治丸の3本マストが目にはいつてきました。明治丸は現存する唯一の鉄船で、国の重要文化財に指定されています。

明治6年（1873）、政府は英国グラスゴウのネピア造船所に、当時としては新鋭の燈台視察船を発注しました。この船は明治丸と名づけられ翌7年に竣工。燈台巡視船とし

て活躍するとともに、明治天皇が乗船するロイヤルヨットとしての役割も担いました。明治29年には商船学校（東京商船大学の前身）に譲渡されて係留練習船となり、多くの海の男を育ててきました。その後、アメリカ軍に接収されるなどの運命をたどりましたが、昭和63年に修復されて現在に至っています。

明治丸のデッキから階段をおりて中にはいると、サロンに通じます。サロンには、船尾側の半円形のソファ1、重厚なマホガニーのテーブル、大理石のカップボードなどがあり、

新企画「江東歴史紀行」開始 3面



明治丸のサロン

いずれもロイヤルヨットにふさわしい豪華な面影を偲ばせています。サロンの右舷前部には明治天皇が使用した御座所があります。公室、寝室、浴室の3室続きとなっている御座所は、意外と質素な感じをうけました。再びデッキに立つて船首を見てみると、海原を駆けぬけた明治丸の姿が時を越えて蘇るような気がします。

***明治丸** ①越中島2-1-16 ②東京商船大学 5245-7300 ③10:00~15:00 ④(個人)一般280円、高校生以下170円。(団体・20人以上)一般170円、高校生以下110円 ⑤公開日 火曜日と木曜日、ただし第1週と第3週は火曜日と土曜日。火曜日と木曜日が祝日にあたった場合は公開しない ⑥JR京葉線越中島駅より徒歩1分

- 凡例
- ①所在地 ②電話 ③開館時間
 - ④館料 ⑤休館日 ⑥交通案内

初代南極観測船 「宗谷」

は84人もの尊い命を救いました。昭和52年退役、54年に現在地に係留されました。

「宗谷」には、乗組員の部屋や食堂などが当時のまま残され、「東京港出発」にはじまる記録映像は、南極に至る長く困難な道程を伝えます。「ふじ」、「しらせ」と代を重ねた南極観測船も「宗谷」の活躍なしには語れません。30数年前「新しいことをなし遂げる」ために乗組員、カラフト犬とともに「宗谷」が果たした役割は、私達にとつて大きな一歩だったことを見学後に実感しました。

***船の科学館** ①品川区東八潮3-1 ②5500-1111 ③10:00~17:00 ④共通券1000円ほか ⑤年末 ⑥門前仲町・豊洲よりバスほか

第五福竜丸展示館

「第五福竜丸展示館」は、昭和29年、太平洋のビキニ環礁で行われた水爆実験で被災した、木造のマグロ漁船「第五福竜丸」の船体と付属品、乗組員の生活用品、ビキニ水爆被災や原水爆に関する資料を展示しています。

「第五福竜丸」は、被災後、放射



第五福竜丸

能が消えるのを待つて東京水産大学の練習船として使用されたが、昭和42年廃船となり、当時まだゴミによる埋立てが行われていた夢の島に捨てられていました。有志の人々の活動によって保存のための会が生まれ、昭和51年、展示館が開館しました。

東隣には、清掃工場のゴミの焼却熱でつくられる高温水を利用した「夢の島熱帯植物館」があります。熱帯雨林に生息する植物が集められ、エキゾチックな別世界が楽しめます。また、北側に広がる夢の島マリナでは、これから海原を駆けぬけようとするヨットたちがしばしば帆を休める姿がみられます。

***第五福竜丸展示館** ①夢の島3-2 ②3521-8494 ③9:30~16:00 ④無料 ⑤月曜日 ⑥JR京葉線・有楽町線新木場駅より徒歩10分

江東歴史紀行

猿江摩利支天と武家屋敷

一 神主吉田兵庫

猿江にあ

る日先神社は、近世では摩利支天社と呼ばれていました。

猿江摩利支天社は「江戸名所図会」の挿絵としても描かれ、その賑わいぶりが伝えられています。



が、猿江にいたことが「門人帳」によってわかります。吉田清右衛門は近藤隼人の家来であるとされています。近藤隼人は旗本近藤用常のことではないかと思われますが、詳細は未詳です。

吉田筑後は、この吉田清右衛門の跡を継承して猿江にきました。しかし吉田兵庫が、猿江摩利支天社の神主として「門人帳」に書かれるようになるのは、天保2年5月からです。このことは猿江摩利支天社の成立を考えるうえで、ひとつの目安となるでしょう。

二 高田藩下屋敷と吉田兵庫

猿江摩利支天社からそれほど離れてはいない、羅漢寺通り（五の橋通り）に面した亀戸出村と下大島町の境にあたる場所に、越後高田藩の下屋敷がありました。明治3年（1870）2月8日、この高田藩下屋敷では翌日に迫った稲荷神社の初午祭りの準備が行われていました。

稲荷神社では、2月の初午の日に京都伏見の祭神が降臨したとされ、全国的に初午詣が行われました。稲荷信仰が盛んな江戸では、各所の稲荷神社で盛大な祭礼が執り行われました。この祭礼では5色の幟が立ち、提灯を下げ、神前に供物を供えて神主や修験者が祝詞をあげ、一日中賑やかに音楽を奏でたといいます。



猿江摩利支天祠（『江戸名所図会』）

しかし高田藩下屋敷が準備に追われていたのは、藩邸の中にあつた屋敷鎮守の稲荷社や、藩邸の近くにあつた稲荷社などでした。しかしこのような稲荷社でも、初午の祭礼のときには、付近の住民たちが詣でたいと願ひ出てくるため、高田藩下屋敷では参詣のために一部の私有地を開放していました。近世を通じて、武家屋敷の鎮守稲荷が靈驗あらたかと評判になり、多くの参詣者を集めた例はいくつもあります。このような場合、武家屋敷側では参詣を拒むことはありませんでした。

さて、上越教育大学附属中学校所蔵の「御下屋敷御用留」（国立史料館蔵写真版）によれば、高田藩下屋敷では2月8日に翌日の初午祭礼の祈禱を「例年の通り」猿江摩利支天社の吉田兵庫に依頼しました。初午祭礼での祈禱は毎年吉田兵庫に依頼していたことがわかります。高田藩下屋敷では、2月9日と10日の2日間祭礼が行われるので、両日の内都合次第で祈禱してほしいと手紙を出しました。吉田兵庫は2月9日に藩邸の庭にあつた稲

荷社で祈禱を行い、下屋敷から祈禱料を受け取っています。

高田藩下屋敷内の稲荷社は、勝智院という寺が別当をつとめていたのですが、実際に祭礼の祈禱を行ったのは、摩利支天社の吉田兵庫だったという事実はとても興味深いことです。ちなみに明治2年（1869）2月には、屋敷内稲荷社の別当が、明治政府の神仏分離令によって勝智院から亀戸香取神社に替わるらしいという話が高田藩邸に伝わっています。

吉田兵庫と高田藩下屋敷の関係は、稲荷社の祭礼ばかりではありませんでした。高田藩下屋敷は毎年の暮れに、お守札を取り替えました。この新しい札を吉田兵庫から受け取り、猿江摩利支天社に対しては初穂料を収めています。初穂料とは、本来はその年にはじめてとれた作物を神に供えるものですが、この時代では金銭で納めていました。

このように吉田兵庫と高田藩下屋敷は、年中行事を通して緊密な関係にありました。しかも両者の関係は、屋敷内の稲荷社の祭礼では、相互の私的なものとどまらず地域社会にも意味のあることでした。稲荷社への信仰が地域住民に深く浸透していたため、祭礼は地域社会をまきこんだものとなっていたからです。高田藩下屋敷の稲荷祭礼では、祭礼の費用や準備を負担する高田藩下屋敷、祈禱を担当する猿江摩利支天社の吉田兵庫、そして、稲荷社に祈願する付近の住民の3者が、有機的に関係しあっていたのです。

（文化財専門員 赤井孝史）

おしらせ

新企画

江東歴史紀行

今回から「江東歴史紀行」の掲載を開始しました(3面)。区域の歴史と文化を語る資料はまだまだ全国に残されています。この企画は、江東区の歴史像・地域像を見直すため、既成の歴史の焼直しではなく、地道な資料調査と二つのソウゾウリヨクで埋もれた歴史を掘り起こしていくというものです。あなたが今まで

知らなかった歴史世界の旅へとお誘いします。

今回は「大砲も造った大島釜屋の鋳物師」です。お楽しみに。

芭蕉記念館から

夏休み子ども芭蕉教室

日時 8月26日(火) 午前9時30分

(集合9時20分)

会場 芭蕉記念館

内容 芭蕉ってどんな人、ほか

対象 区内在住の小学生

定員 30人(先着順)

費用 無料(筆記用具持参)

締切 8月25日(月)
申込 窓口または電話で
ジュニア俳句教室

日時 9月13日(土) 午前9時30分

(集合9時20分)

会場 芭蕉記念館2階研修室

内容 俳句をつくってみよう

対象 区内在住の小学生30人(先着順)

費用 無料(筆記用具持参)

締切 9月12日(金)

申込 窓口または電話で

◇芭蕉記念館

江東区常盤1-6-3
☎(3631) 1448

ここにも歴史があった



この写真は、明治43年(1910)8月に写され、「深川砂村附近ノ浸水」と題されたものです。

かつての区域が、風水害のため大きな被害をうけたことはよく知られています。とくに明治43年の洪水では、城東方面の浸水家屋が1万8803戸、深川方面では約3000戸が被害をうけました。

洪水は大正13年(1924)の荒川放水路の完成によって減りました。

が、私たちは過去の事実でさえ、自分が体験したことでもないとなかなか実感がわかないものです。おそらく江戸時代の水害も上の写真と同じような情景だったのではないのでしょうか。

旧大石家住宅(区指定文化財)の屋根裏が、洪水を想定して避難のための空間を広くとってあるのもうなずけます。

この写真は、八王子市にお住まいの都築幹一郎さんからご提供いただきました。

伝統の技 実演公開
毎月第一・第三日曜日に工匠壺番館(森下文化センター内)で行っています職人さんの今後の実演日程は次のとおりです。

9月7日 漆工 前田 仁



9月21日 桶製作 川又 栄一



*時間はいずれも午後1時~3時

「下町文化」に対するご意見・ご感想をお寄せください。みなさんの声を紙面に反映させたいと思います。

〒135 江東区東陽4-11-28

生涯学習課文化財係

「下町文化」担当まで